

# 未来を歌に～戸倉小学校 子どもたちひとりひとりの実体験から「小さな幸せ」の歌が生まれた



▲2012（平成24）年2月 戸倉小学校4年1組のみんなは、先生が書いてくれた黒板の歌詞を見ながら、毎日歌の練習をしていた。（当時授業を行っていた登米市の善王寺小学校の教室で）

写真提供 トヨタ子どもとアーティストの出会い

2011（平成23）年3月11日、海のすぐそばにあった戸倉小学校の児童は、近くの高台に避難。津波が迫ると、さらにその上の小さな神社に避難して、かろうじて津波を免れた。津波に囲まれ、島のようになった神社の境内で、厳寒の夜を過ごした子どもたちは、その後も暗闇や地震への恐怖から抜け出せずいた。戸倉地区は被害が大きく、ほとんどの子どもたちが家を失うなど、日常生活も大きく変化していた。

同年冬、戸倉小学校4年生は、1年を振り返って歌を作るワークショップに挑んだ。そのワークショップを実施できるかどうかは、先生方が慎重に検討した。震災を思い出し、子どもたちの恐怖が甦るのではないかと心配されたからだ。議論の末、あえてワークショップを行うことにした。震災後の1年を、友達や先生、家族や地域の人たちと一緒に生き抜いて来た自分たちの姿を見つめ直し、折々に感じたささやかな幸せを振り返ることは、自己肯定や記憶の引き出しを整理することにつながると考えたのである。

完成した歌詞の一節一節は、クラスの誰かが経験した“小さな幸せ”である。その幸せをみんなで共有するこの歌は、子どもたちの心に深く刻まれ、彼らの心を癒し続けた。結果的に子どもたちの心の傷の回復につながったと、先生方は実感している。

2012（平成24）年3月11日に行われた町の追悼式で町内の他の4校の児童たちとともに曲を披露。彼らが作った曲のエンディング、「ありがとう ありがとう」というリフレインは135人の子どもたち全員で歌われ、会場の人々はあふれる涙をおさえることはできなかった。

「小さいけれど大きなしあわせ」  
作詞作曲 戸倉小学校4年1組

家族に会えたとき しあわせ  
電気がついたとき しあわせ  
水道が出たとき しあわせ  
友だちとひなんして  
ごはんを食べた  
自衛隊のおぶろに  
のびのびはいった

学校が始まったとき しあわせ  
ランドセルもらったとき しあわせ  
たきだしが来たとき しあわせ

ラーメン カレー  
かき氷 たこ焼き  
牛どん ソフトクリーム  
フライドチキン やきいも

エグザイル エーケービー  
きよはら ジュディ・オング  
サンドウィッチマン コロケ  
サンブラザ エソラビト

いろんな人に会えた しあわせ

二重とび 三重とび  
わたりどり とんだよ  
鉄棒 マット運動  
季節も 回ったよ

みんなでがんばったこと しあわせ  
明日を生きること しあわせ  
ありがとう ありがとう